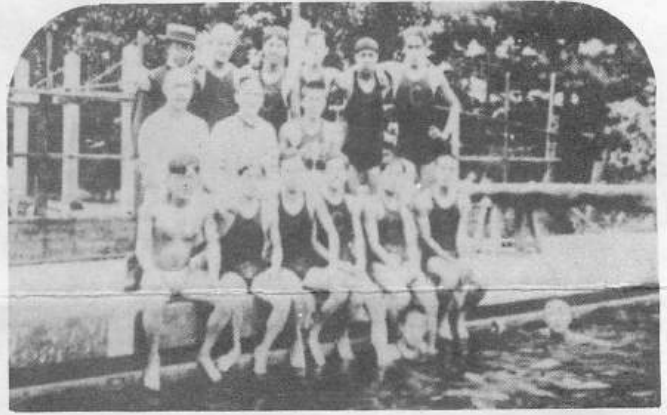




古林喜楽氏が上筒井に就任の頃の水泳部

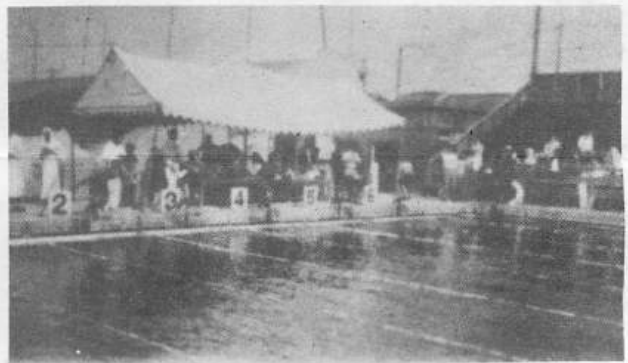




昭和5・6年の頃の水泳部



上筒井学舎食堂風景



三商大戦於大阪市立プール



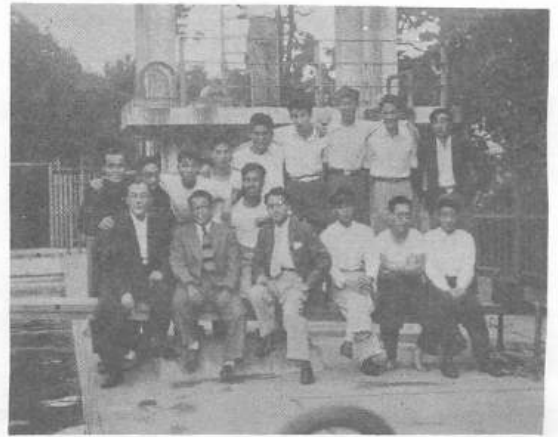
26年8月高知合宿  
桂浜にてフリチンで泳ぐ

橋 溝 佐 石  
本 口 藤 井  
  
田  
淵



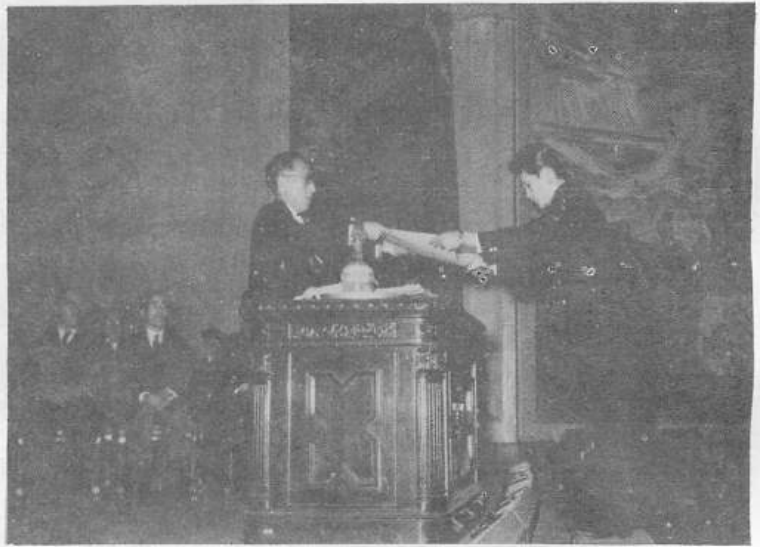
昭和25年8月鴨島合宿

山 浜 天 小 菅 小 西  
本 川 野 平 原 岡  
  
石 今 関 岡 中 煎 太 ?  
井 枝 山 沢 島 塚 田



昭和27年9月月見の宴

小 関 煎 紳 今 ? 岡 田 三  
原 山 塚 原 枝 沢 淵 宅  
  
中  
柏 中 島 石 天 西 村  
木 村 井 野 岡 田



古林学長卒業証書授与



古林喜楽氏叙勲祝賀会



古林喜樂氏叙勲祝賀会風景



後  
列  
左  
から  
中  
小  
細  
藤  
山  
松  
中  
天  
野  
野  
山  
口  
井  
谷  
林  
西

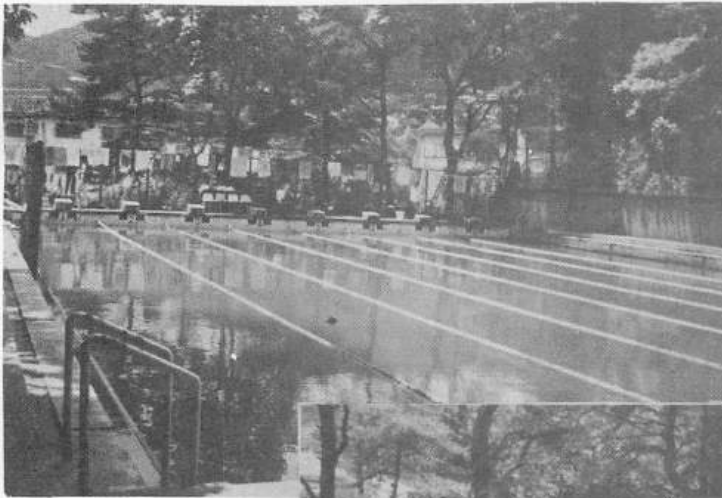
伊  
檀  
佐  
作  
每  
川  
丸  
弓  
藤  
上  
藤  
田  
田  
本  
末  
削

前  
列  
左  
から  
印  
藤  
長  
瓜  
植  
北  
上  
田  
南  
森  
川  
生  
西  
川  
淵  
田

高  
山  
江  
洲  
敷  
田  
佐

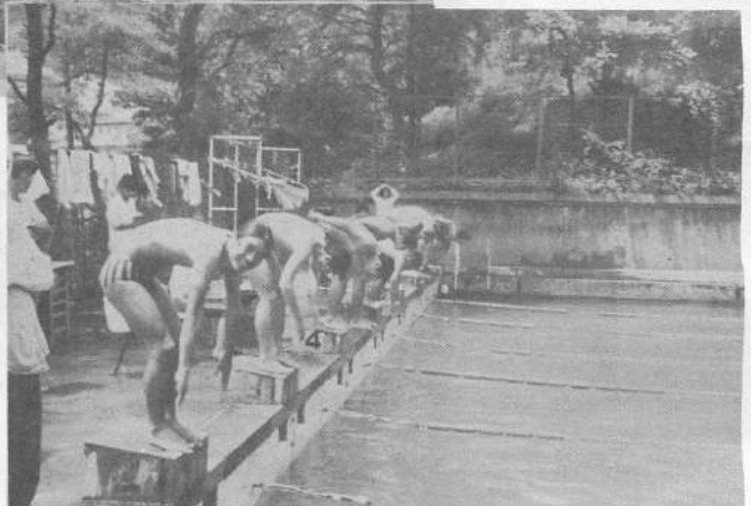


現 役 部 員



現在の六甲プール

練 習 風 景



神戸経済大学<sup>学</sup>校歌 商 神

しょうしんあやなすつばさをあげて  
れいじょうはるかにひがしをさせば  
くしきこのみはくもまをもちて  
あきつ—しまねにおつとぞみえしと  
こ—ろはここぞきくすいかおるみ  
なとがわらのちかきほとりに  
かくつたわりしあめのまとしも  
ひとはきとらでいくとせかへぬ

1. 商神彩なす翹をあげて  
 靈杖遙に東を指せば  
 靈しき果実は雲間を漏りて  
 秋津島根に落つとぞ見えし  
 所はここぞ菊水かおる  
 湊河原の近きほとりに  
 かく伝わりし天のさとしも  
 人はさとらで幾年か経ぬ
2. 神の息吹のこもりて成りし  
 靈果いかで地に朽つべき  
 豊栄のぼる朝日のかげに  
 八州の外の潮風吹きて  
 いつしか催す気運に乗じ  
 わが学校ぞ世に生まれたる  
 眠る商界夢さますべき  
 使命は天の授けし所
3. 此処摩耶の山六甲の峰  
 連り亘る山ぶところに  
 数の若鷹はぐくまれ居て  
 静かにうかぶ雲の行きかい  
 朝妙なる琴のひびきは  
 敏馬の浜に松を吹く風  
 夕やさしき舞の姿は  
 茅渚の浦曲に白帆行く影
4. 希望に満てる春の潮の  
 寄せてはかえす清き渚や  
 熱誠もゆる夏の盛りを  
 いたわる風の葦台の里  
 須磨や明石をかけて照るらん  
 月には物のあわれをぞ知る  
 冬は凜たる後に嵐  
 奔馬空行く勢示す
5. 天れ山水の秀麗の気は  
 偉人傑士を起たしむとかや  
 天の使命を胸に収めて  
 清き自然に抱かれながら  
 筋骨鍛え智徳を研く  
 切磋琢磨の三年の春秋  
 養い得たるうつ勃の意氣  
 抱負を語れや干余のおのこ
6. 金欧無欠の三千余年  
 かゞやく光は劍の誉  
 心はおなじ大和男子の  
 我等は牙籌を執って起ちなん  
 日出ずる旗を高くかざして  
 日入らぬ国と手を携えて  
 目ざす平和の戦の場に  
 匂う御国の花ぞ咲かせむ
7. 雄飛の時ぞとねぐら離れて  
 野に立出ずる蒼鷹幾羽  
 爪も研ぎぬ力も足りぬ  
 尋にも余るつばさを張れば  
 枝の百鳥皆おそれ伏す  
 扶搖万里の風を起して  
 おのが向々東に西に  
 雲に突き入る勢見るや

## 水 泳 部 年 表

西 曆	年 号	月	備 考
1902	明治35		神戸高等商業学校創立(現在の葺合区野崎通)。
1917	大正 6		第3回極東選手権大会(現アジア大会:白山氏出場)。
1918	7		水泳同好者が集まり、青谷の池で練習し始める。
1920	9		最初の練習試合、対茨木中学戦で完敗を喫す。
"	"		対大阪高商戦始まる。(現市大戦)
"	"		正式に水泳部設立される。
1923	12	3	神戸高商の大学昇格確定。
1924	13	4	上筒井プール建設される。
"	"	9	凌霜会創立
1929	昭和 4	4	神戸商業大学創立
"	"		全日本商大水上競技大会始まる。(現三商大戦)
1934	9	7	六甲台への校舎移転式行なわれる。六甲台プール建設。
1935	10		対大阪商大戦に水球が加わる。
1940	15		神戸商大予科開設。
1942	17		予科水泳部設立される。
1943	18		徴兵延期制度撤廃。水泳部員次々と徴兵される。
1944	19		神戸経済大学と改称。
1945	20	8	終 戦。
1946	21		六甲台プール接收される。
1949	24		神戸大学創立。
1952	27		六甲台プールの接收解除。
1953	28		小林喜楽氏 神戸大学長に就任。
1959	34		水球コーチ植中氏を迎える。
1960	35	5	60年安保。
"	"		春の温水合宿初めて行なわれる。
1962	37		風呂が建てられる。
1964	39		姫路分校の閉校式。全部員一緒に練習。
1968	43		浄化装置完成。
1970	45	5	70年安保。

## 神戸大学水泳部の成立

白 山 源 三 郎

題が少し大きすぎるが、「競泳」編集部で神戸大学水泳部が、何時、どの様にして成立したかと云う事などを明かにしたいらしいし、尤もなるとも思うので、私の記憶をたどって見るだけの事である。又、最初に断って置くが、私の神戸大学水泳部の始めと云っても、旧制神戸高商水泳部の昔に遡っての話であり、これが多分今も直流であろうと思うが、その後他に流れがあれば、それは私は知らない。

私の旧制神戸高商に入学したのは大正六年（一九一七年）で、その夏日本で最初の総合国際運動競技大会と云うべき、第三回極東選手権大会（現在のアジア大会の前身で、極東オリンピックと云われて居た）が東京芝浦で行われ、私が入学前に選手に選ばれて居たので、大毎の後援により関西チームの一員として出場し様としたが、正式に学校え欠席届を出すと、文部省の方針として許可が出ない恐れがあるので、無届欠席をし、内密に東京へ行つたと云う様な時代であったので、学校にはまだ水泳部と云う様なものはなかった。

当時神戸には丁度学校の下の方の海岸に、YCACのクラブハウスがあり、外人が泳いで居たので、小数の学生で之れとの交流があった様にも聞いて居る。学内にはあちらこちらの水練場で水泳を習った愛好者が何人か居たと思う。その内の古い所では、大正五年卒の古銭栄三郎さんを知って居る。芦屋水練学校出身と思うが、このYCACの外人からクロールストロークを習われたことがあり、そのグループの人は日本でクロールを知った最初であると云う話が出た事があり、我国水泳史上重要な役割をされたことになるが、これも水泳部としてではない。

私の入学した当時、敏馬の浜で学校の同好者が語り合つて、遠泳を行い、学校の学生控所の牛乳屋の小母さんが頼まれて、飴湯を造つて届けたと云う話を、小母さんから直接聞いた事がある位で、小数の同好者で、思い付きで遠泳を試みたり、又寒中水泳を試みたりした位のものであった。寒中水泳にはその後私も参加した事がある。

第三回極東オリンピックで正式の水上競技が行われ、私が之れに出た事もあって、又、その少し先の頃から、二、三の中等学校や、大学、専門学校で、日本泳法だけでなく水上競技を主体とする、水泳部が出来始める形勢にあつた事でもあり、本学でも同好者が集まり、寄宿舎の住人が中心となつたと思うが、水泳練習を

やろうと云う事になり、海では競泳の練習は出来ないと私が主張して、青谷温泉の下にあった池に、丸太や板を持って行って、スタート台や、ターニングボードらしいものを造り、競泳練習を始めた。極東オリンピックの翌年、即ち大正七年でないかと思う。『立派な広い海が近くにあるのに、何故溜水の池などで泳ぐのか』など悪口を云われ乍ら、結構楽しく泳いだものである。そして新聞社主催の競泳大会が、鳴尾の堀割で行われて出場したり、少し後には、故高石勝男君などの有名になる前の、茨木中学から招待されて、威張って行ったらコテンコテンにやられてしまった事などもあった。

この茨木中学との対抗競技は、極東大会に私と共に出場した中田要吉君が、茨木の初代のコーチであって、練習の結果を試して見たいので来て欲しいと頼まれて行ったのであった。

その後、当時テニスの神戸・大阪両高商の対抗競技が相当有名になって居たので、これにヒントを得て、同じく水泳の対抗競技を始めたのであるが、これは今では日本最古の大学対抗水泳競技となった。(競泳昭和四十四年通刊一七号参照、並に全四十四年神戸大学対大阪市立大学対抗、第五十回大会プログラム参照)

昭和四十四年七月十三日、大阪市立大学プールで行われた、第五十回両校対抗の時には、私は、第一回の時から審判をして貰ったり、色々免倒を見て頂いた藤井正太郎先生と約束した事もあつ

て、懇々大阪市大プール迄出掛けた。藤井先生にお目にかゝり、古林前学長にもお目にかゝり、閉会式には挨拶も少ししたが、私としては感慨胸に迫るものがあつた。五十年もの間、代々の水泳部員諸君が、その間、永い戦争などもあつたに拘らず、此歴史的な対抗競技をよく絶えさせないで、五十回迄続けて呉れたと感激せざるを得なかつた。藤井先生や、古林前学長御指導も大きな力であつた事と思ひ、又感謝の外なかつた。

猶、藤井先生は、この第五十回大会の後、間もなく他界されたし、猶附加えるならば、第五十回大会プログラム十四頁の歴年会記録表の、第三回大会記録、四〇〇米自由型第三位に奥村(左)とあるのは、当時大阪高商学生であつた奥村綱雄君で、野村証券前社長である。同君は後に京大経済に入ったので、京大水泳部先輩団体である『かたろう会』の会員であり、バトロンである。古林前学長も後、京大に入られたし、私も同様であるので、就れも『かたろう会』会員で親しくして貰つて居た。所が御承知の通り先頃急逝されて居る。淋しい事である。

扱、以上の古い思出の数々から要約すると、神戸大学水泳部の結成は、大正七年の青谷の練習の時と見るのがよい様に思う。時のメンバーは競泳会先輩名簿に掲げられて居る高商部第十回卒業生(大正十年)天野、山野、小笠原等の諸君に小生、それに第一回卒業生の野田栄一君以下数名の諸君かと思う。当時のそれよ

り上級生の人は居なかった。

第一回の試合は、多分大正八年と思うが、对茨木中学練習試合であり、後、毎年新人を加え、大正九年には対大阪高商戦が始まり、延々五十余年、今日に及んで居るのである。

唯、この后、大学昇格、学校併合、学制改革等、学校そのもの変更による水泳部の変遷があったと思われるから、之れらもその年代毎の委員により、取纏めて置いて貰うことは大変よい事であると思う。

## 溝口先輩取材記

編 集 部

先日、編集部が高商十八回の溝口卓郎を訪問し取材を兼ねて、いろいろな話を聞かせて貰った事等を紹介してみようと思います。

溝口氏は大正九年に神戸高商に入学、同十三年卒業です。高商に於ける修業年限は四年間で、予科一年本科三年となっています。予科は全寮制となっており、本科に於ては自由となっていました。また高商から上級学校への進学は、本科二年終了後に東京高商専門部を受験することか可能となっていた。凌泳名簿の高十八回川北正喜氏はこの例で、従って川北氏は東京高商（現一橋大学）卒業なのである。また一般大学へは高等学校卒業の検定試験に合格

しないと受験することができなかった。

さて大正十年頃にクロールが日本に伝わるまで、トラチオンクロール、別名テンバ抜きという泳法が競泳の主流を占めていた。この泳ぎは抜き手と多少似ていて、足は煽足を使い、一回水をける度に顔を上げたまま両手でサツサツと水をかくという変則的な泳ぎであった。

溝口氏は本科一年の時に入部されたのであるが、当時はプールがなく青谷の池の時代であった。この頃のことはいろいろ書かれているがその練習方法は、まず一ヶ所に飛込台を作り、そこから五〇mの所に池を横切つて見通し線を作り、それを通過するのを確かめながらタイムを計っていた。だから五〇m以上は計れないのである。また長距離の練習は飛び込んで池の真中位まで行くと適当に引き返してきて、ターンしてまた泳ぐという方法で、せいぜい五〇〇m位であった。

学舎の近くには外人クラブがあり、其処の連中が海でウォーターポロをやっているのを見て、高商の水泳部が早速試合を申し込んだ。ルールも何も知らないまま彼等のごつてい体を相手に悪戦苦闘、当然ボールは一方通行であった。また学校の行事として夏期合宿が行なわれたりもした。青谷の池にも嬉しいことがあり、池のそばにマドンナなる女性が存在し、この女性を楽しみに池に通う足どりも軽かったとか。また学生の間で宝塚歌劇が人気があり、現在では殆んど女性客であるが、昔は男性客も多く、阪急西宮

駅から歩いてよく通ったものだそうだ。

当時の水泳部は人数も少なく、部員勧誘にも熱を入れた。水泳で名の通っていた茨木中学（大阪）、田辺中学（和歌山）、安房中学（千葉）、等を筆頭に遙々四国までも神戸高商を受験するよう説得に回ったこともあった。茨木中学に在学していた高石勝男氏を、水泳部に入れるため、受験させるころまでは良かったのだが、惜しくも失敗し早稲田大学へ行ったのは誠に残念なことであった。水泳競技としては高専大会というのがあり、東大が主催し全国の高等学校、専門学校が集まり、例年伊豆の戸田（へだ）で行なわれていた。プールではなく海の水泳場である。高商の水泳部からも一六回野田曾一氏が出場されたこともあった。

大正八年に茨木中学に日本最初のプールが学生の力で完成し、翌九年神戸高商対茨木中学の練習試合が行なわれ、我部は散々な目にあつたのである。同年大阪高商に試合を申し込み、第一回阪神高商戦が茨木中学のプールで行なわれた。面白いのはこの対校戦に於て、競技種目の中にプランジューブ・ディスタンス・フライング（of distance）というのがあった。これは飛び込んだ後一分間体を動かさずにじっとしていて、その到達距離を競うという種目で、二年程やったが、あまり馬鹿馬鹿しいのでやめたということだ。

大正十二年大阪市立プールが完成、それまで浜寺の海で行なわれていた小規模の水泳競技が、大阪毎日新聞社主催でこのプール

に於て、インターハイとして行なわれた。その後学生連盟に引き継がれた模様である。この試合は丁度九月一日で関東大震災によつて、プールの水が大きく揺れたのは印象的であつたそうだ。また同年神戸高等工業にもプールが出来、試合をした。

しかし大正十三年、上筒井学会に待望のプールが出来たのは、溝口氏が学校を卒業されてからのことであり、このプールで練習できなかつたことは、今だに心残りかするとのことでした。

## 私と水泳部

古 林 喜 楽

私が上筒井の神戸高商へ入学したのは、大正十年である。当時の水泳部は、青谷の池に板をたててこれをタイン台にし、水藻や蛙をかきわけて泳いでいた。ある日、出かけてみたら、部員が妙な泳ぎかたをしている。私は観海流で相当鍛えていたので、早速競泳を申しこみ、抜手で思いきり泳いだのが負けた。それは何という泳ぎ方だと聞いたら、クロールだという。そこで初めてクロールなるものを覚えたというわけである。私は三年で京都大学へ転学したが、その直後にプールがつくられた。プールといつても、防火貯水池ということで、四コースの小っぱけなものであり、内装もコール・タールがアスファルトのようなものを塗った貧弱な

ものであった。

昭和六年、教壇に立つ身として母校へもどってきたら、このプールで小山賢之助君やら、草野嘉一君・山田常雄君・宮本伯男君らが、猛練習をしていた。私もつい飛びこんでよく一緒に泳いだものである。そんなわけで、当時の水泳部長は、北村五良教授であつたが、実質的には私が部長のような恰好になり、やがて正式の部長となり、昭和二十八年学長になるまでつとめた。学長が一

つの部の部長をしていたのでは、他の部がひがむといわれて、やめたのである。

話しはもとへ戻って、昭和九年大学が六甲台へ移転したときに、今のプールがつくられた。スプリング・ボードも備えつけられてあつたし、ハイ・ジャンプ用の飛び込み台もあり、とりわけ内装のタイルはデラックスなもので、東の明治神宮プール、西の神大プールといわれる位の立派なものであつた。水はグラウンドの東北台地につくられてあつたので、冷たかつ

加納



池からの山水であつたので、冷たかつたが、水代はただであつた。四月の泳ぎはじめの頃などは、冷たいを通りこして、いたいという感じであつた。五月の第一日曜日に、神戸イン・カレの試合があつたので、四月には早々練習をはじめていたのである。長田の市民プールで催されたこの競技についてゆき、試合のあい間に飛び込むのが、大

体私の初泳ぎとなつていた。

その頃プレストを泳いでいた、のちに毎日新聞の論説委員になつた糸川義男君が、ある日部誌をつくるというてきた。そして題字を書かされた。それ

恋



第五回記念祭

が今も続いている『凌泳』である。

終戦直後、講堂とテニス・コートと共にプールが、進駐軍のために接収されてしまった。解除になるまで部員は、松蔭女学院のプールを借りたりして練習していたらしい。解除されたとき、一番驚いたことは、あの立派なマイルが滅茶苦茶にこわされていたことであつた。一体アメチャンはプールで何をしていたのかといふが、その代り部室とプール周辺の囲いがなくなつたので、夏には近辺の子供が泳ぎにきて、溺死者を出したこともある。ちなみにいまある風呂や浄化装置は、水泳部の先輩たちの援助でつくられたものである。こんなこともきっかけとなつて、正式に先輩の会をつくらうということになり、凌泳会が結成された。そして私がか会長に推されてしまったようなことである。

最後に、毎度のことかどうかだが、私の悲願は、この上は三百六十五日、元且も泳げるプールを、つくってほしいということである。

## 上筒井のプール建設

高一九 高 森 安 夫

この事について書けとの御指示をうけたので、おぼえている程度で書きしるします。

### 水島校長の英断

大正の末期世は不況下にあつたが、学生達は時代に抗してそれぞれ新しい生活を試みた。

その頃は日本水泳会の始興期であつて、茨木中学にプールが出来て、そこに高石君などが育つてることが目立った存在であつた位である。

当時筒井台水泳部は、青谷の池、それは学校から三十分か四十分位の丘のふもとにあつたが、その池に集まって泳いだものであつた。雨の日などそこでクロールしているのを見ると、まるで河童が泳いでいるようだった。クロールもまだ日本で知る人はいない、教える人もないので、ハウツーヌイム (How to swim) と  
いう原本をしらべてやってみたほどであつた。

その当時部内で学園プールが是非ほしいとの声がおこり、私はその声をたづさえて校長室のドアをたたいた。校長はあの渋い温顔でだまって聞いておられたが、何も云われなかつた。

それから半年もたったある日、校長が呼んでおられるとのこと  
で私が校長室へゆくと、

「君、この前たのんでいたことがこんど実現することになった。」  
と、いわれる。

私は余り唐突で夢のようだった。そして

「どのようにして実現出来るのですか。」

とたずねた。すると、

「あの裏の煙突を今度崩すので、そのレンガを用いたまえ。そし  
て『防火用貯水池』を学園内につくるのだ。」

と、いわれる。あの煙突は、「裏の煙突に石橋さん」と枝の俗謡  
にもうたわれているほど、長身総レンガ造りの有名なものだった。

以上のように手短かな御説明で合点できた。あとの設計は凡て  
小川・多田両先生に相談し乍らすゝめられた。長さ二十五米のプ  
ールは武道場と大運動場の西南端の土手との間の狭い土地一杯に  
つくられた。

#### 当時の水泳部

二十五米のミニプールであるが、その年の夏からかかってたし  
か翌春に出来上り、満々と水をたたえたプール内の底と横の四面  
は黒ぬりで、底面にはコースラインが白線で何本かしかれてあっ  
た。全く粗朴なものでしかなかった。

しかし十数名の部員は喜色満面で泳ぎ初めた。プールのおかげ  
で部員の外に陸上選手の中からも灘波君などが泳ぎに来てくれて

その数も大きくふくれていった。

当時の水泳部は草わけの白山源三郎さん、兪光兼、名マネージ  
ャー以来受けつがれたもの、構口主将、山下・中村（数）・井関  
高田・大嶋・三輪などの諸兄をようして筒井台水泳部の勃興の時  
代のもうでもあった。藤井先生を名譽顧問とする対大阪高商戦で  
は、相手も強かったが当方も負けずに攻撃を加えたものだ。

#### 兵庫県中等学校競泳大会

二十五米でもプールは当時まだめづらしかった。翌年であった  
か、わが水泳部主催で県中等学校の競泳大会が開催された。数多  
くの若者が集まって、あのプールでしがきをあげたことは未だに  
目に残っている。

このプール、そしてあとに出来た完備したプールによって、そ  
の後幾多の有力な水泳マンが養はれたことは、忘れることが出来  
ない事実である。しかもそれらの人々が社会の第一線で皆、良い  
仕事を行って居られることを思うとプールも良い役割をしてくれ  
たと思う。

## 六甲台の新プール

学四 桑 川 義 男

はじめ手紙で水泳部の歴史を特集したいから「凌泳」発行当時

の思い出を書くように、という注文があったのだが、卒業後これ四十年近くも経った今日では、どう思い返してみても思い出のかけらも浮んでこない。それで断わりの手紙を書いたのだが、こんどは植西君がじきじき拙宅にやってきて、それなら六甲台の新プールの思い出でも結構だ、とにかく昭和八と九年頃のところの記録が抜けているので、なんでもいいから、その辺のところの思い出を書いてほしいということであった。

そういうことなら、まああれこれと記憶の糸をたぐって責めを果しましょうと約束したのが本稿である。従ってとりとめのない思い出話になりそうだが予め御了承をお願いしておきたい。

私が水泳部に入れてもらったのは昭和七年の四月である。もともと選手生活の経験のない私などは競技生活をしようなどは初めから考えもしなかったが、泳ぐことは子供の時から好きだったのと、一度海ではなくプールで泳いでみたい、といった単純な欲望もあったので入部させていただいたのである。当時の上筒井の学舎にあったプールは運動場の南西の隅にあって、北側には柔剣道場の大きな建物がプールの際まで迫っており、西側は塀、南側は木立に囲まれていた。小じんまりとした閑静な雰囲気、授業の終わったあとなどのんびり泳ぐのにはもってこいの環境であった。その上名簿を御覧になっていただけ判るように、亡くなられた鎌本さんや小西さんを入れても二、三、四回生全員で十人あまり、泳いでいるのはせいぜい四、五人、試合前の多い時でも六

七人といった小世帯だったので、まことにのんびりと、和気あいあいといった調子だった。そういうことだったので、対校試合などとなると選手が足りず、小生の種目の平泳などには同期の剣道部の山本國次君やラグビー部の小松哲雄君などに応援を頼んで、漸く一種目三人のエントリーを満たしうるといった状態だった。

昭和九年夏の三商大戦など場所は神宮プールという暗舞台だったにも拘らず、折柄暑中休暇中という悪条件も重なってメンバーが揃わず、私と五回の野村君の二人で上京の途次、汽車を途中下車して帰省中の池谷君と千葉君（現在大野君）だったかと思うが、を狩り集めながら上京したことがある。ともかく東京も大阪も両商大とも予科があり、予科の連中も試合に参加していたのに当校は学部三年だけ、全学生集めても六百人に満たない小世帯だっただけに、こういった状態もやむをえなかったかもしれない。

ところで上筒井の学舎から現在の六甲台の学舎に移ったのは、私の最終学年の昭和九年の夏であった。六甲台のプールでいつ初泳ぎしたのか記憶にないが、えらく高台にあって眺望はまことにいいのだが、飛込台などのあるせいで中央部の水深が上筒井のプールなどよりもはるかに深く、そのためにその辺の水温が冷たく感じられたのを覚えている。そのせいかくの飛込台はもちろん、飛板も活用する者は殆んどいなかったように思うが、たゞ飛込台の上で甲羅を干しなから、遙かに神戸の街並みを見降ろしつゝうつらうつらするのは悪い気分ではなかった。

この六甲台のプールを作るのには北村五良先生や、古林喜樂先生をはじめ大学の事務当局の方もだいぶ苦楽されたようで、予算を渡す文部省をなんだかんだと口説いて、漸く防火用貯水池として認めさせたということを聞いたことがある。いずれにしろ始めて見た時は、

「わあ、立派なプールだな。」

と歓声をあげたことを覚えていたが、水深が深いために水の入れ替えが容易でないこと、中央部に向って急傾斜しているため掃除の時に足がすべって不便なことなどを間もなく発見した。それに上筒井と違って高台にあるため少しの風でも肌寒い思いをしたようにも記憶している。

いずれにしろわれわれ四回生（昭和十年卒組）にとっては、シーズンも半ば以上過ぎた頃になって六甲台に移ったので、たいした練習もしないままにシーズン・オフにはいつてしまい、新プールの十分に活用できなかつたのが、未だになんだか心残りかしているような気がするのである。

## 神戸大学水泳部の

### 対外的役割について

学七 村 上 秀 造

私が先輩団の方々より昭和十二年度のキャプテンを命ぜられた

時に与えられた任務は三つあった。

一、関西学生水泳会に残して来た諸先輩の指導的役割を更に向上せしめること。

二、関西インターカレチの一部校の地位を確保すること。

三、神戸大学水泳部の長年指導して来た県立第一高女（現神戸高校）の水泳コーチを誠意をもって努めること。

等で、人格円満を旨とし部員の一致団結等は当然の御要望であつたと思う。

惟うに神戸大学水泳部は日本最古の定期戦（大商大戦）をもつた程の対外的に伝統ある教養深い水泳部で、それ故にこそ次期キャプテンは先輩団で協議指命されていたらしく、まさか「さぼりの私」とは思いもよらなかつた。早速香山、宮本先輩に任に堪えないと申出で、逆に説教されて引受けざるを得ない羽目になつた。

又、昭和十二年二月末に関西学連実行委員校に関学大と当校が最高点で選出されるに及んで、翌年二月には私自身の軽重がその投票で結論づけられると思うと、愈々任務の重要性が感ぜられた。

それから学業を抛って半年間、今はなき藤井先生のお宅に日参、連盟の仕事、全国高商大会、インターミドル、インターカレチ、アメリカのメデイカ選手招待大会等、目まぐるしい日々で関西水泳学生代表として働き、県一女の水泳コーチも勤め、翌昭和十三年二月次期キャプテン大内君をつれて、関西学連実行委員選出に

臨み、関学大を遙かに放して最高点で大内君にバトンを渡し任務を完了し得た時、思わず感激の涙が流れた位であった。

もう一つの悩みは関西インターカレチの一部校として残ることであった。当時傑出した部員のなき時で藤井先生も御心配になり、甲子園プールが新設された機会に開催された総務委員会で、プールが九コースになったから一部校を七校より八校にしてはと提案され、得点があれば残ることになり大内君が背泳で入賞し、漸く胸をなでおろしたが全く藤井先生のお蔭であった。

以上非力な私を絶えず御指導下さった温顔の藤井先生御夫妻、アドバイス激励して下さいた当時日本水泳連要職にあられた小山先輩、其他諸先輩、部内では伊藤、太田、高橋君等の内部援助も忘れられないもので、私自身の人生の歩み方がこの体験から決定的になったといっても過言でないと思っている。

#### ま と め

終戦後、時代も幾度か変遷、人の思想、考え方等めまぐるしい程変化を来したが、神戸大学水泳部の信条は、「強い弱い」よりも、「対外的に品格のある水泳部でなければならない」と、今でも私は信じている。

現在ある現役諸君の考え方も現代の学制、スポーツの在り方にふさわしいものであろうが、神戸大学水泳部のよき伝統は出来るだけ残していただきたいものである。

## 戦 中 部 員

学一二、尾 上 信 三

昭和十五年入学、昭和十七年九月繰上げ卒業と云う全くの戦争大学っ子であった。

教練の出席日数が優先し、日曜日にも時に集合が掛り特別訓練があり、三宮の消防署、警察署にての応援教育があった。亦、四日間ほど江田島の兵学校にての海軍士官の勧誘のためらしき教育があり、甲板掃除、カッター競漕などをやらされたこともあった。紀元二千六百年と云う年もあり、全国が国威発揚に燃え、日中戦争から大東亜戦争へと突入した期間でもあり、何となくこの渦に巻き込まれていった。学生は容易に痛飲する事も出来ず、学生服をぬぎ捨て（今日は学生服姿など中々大学生では見られぬが）、背広に着替えて加納町界限を飲み回ったものであるが、諦観した気持で時代の波に乗り、何ら現在の学生の如き抵抗力はなかった。只々毎日を戦場に行かされることを覚悟し、体力を鍛えることにのみ専心した。

夏は水泳部にて冬はアイスホッケークラブ、その間ラグビー、体力検定の練習にてすこし書を読む時間は少なかった。

毎年四月から水泳部の練習が阪神甲子園球場のスタンド下の室

内プールから始まり、六甲台プールの清掃も並行して行なわれた。清掃後の問題は水もらいの交渉の苦勞にあつた。水不足で断水が多く、生活にも影響していた頃である。市の水道局との話し合いには一同頭を痛めたものであつた。真夏に入れば又、水の入れ替えが悪臭、腐敗から健康上にも必要であつたが、思うように渉らず、プール用には配水許可が出なかつた。プールはカルキにて濁つた緑の水となり、氣持悪かつた。亦今では公害問題となるような水銀系の防腐液を入れたりもした。

昭和十七年の四月のプール清掃の時に、日本への米軍の初空襲があつた。機種などは分らなかつたが、真黒なぶざまに太つた双発の軽爆機で無氣味な奴であつた。

山口八郎（大分県海上にて航空訓練の指導中に戦死）、稻木俊夫、岡本忠男、守田謙三君等々と、

「アラナンジャ見たこともない奴だが新しいのが出来たんかいな」と云つて見上げ見送つたところが、川崎重工あたりでポトンポトンと黒い糞みたくのを落したので、  
「コリヤおかしいぞ。」

となり、下山して初空襲と知つた。正にコン畜生となり若き血は燃えたものである。

我々は、当時は知識もなく敗けることは全く思いもせず、入隊への体力準備に一層奮起して、その時代の中に引きづり込まれていったのである。

併し一方、三商大戦に対する記録目標には一同懸命であり、時に戦争を忘れてその中に没頭した。特に三商大では強かつたゴロには練習を集中した。美しい戦いであり戦後談にては共に敵味方を離れて花を咲かせ、次回をきして記録更新にタイムウオッチに握つたものである。

三商大は東京では明治神宮プール、大阪は府民プール、神戸は泉民プールと当番でやつたと記憶している。東京の神宮プールの青々とした透き通つた水は、六甲台プールに比べて誠に羨しく今も目に浮かぶ。

この間先輩は当然ながら卒業とともに陸軍、海軍へと入隊し学徒出陣の走りとして、二回目の繰上げ卒業で我々もほとんどが卒業の日から十日以内で入隊した。

以上二年半の水泳部時代の一駒を思いつくままに不連続に記述して見た。

## 赤 禪 野 郎

学一六三宅 林

戦中、戦後の激動の真中の水泳部に籍をおいた者の一人として、その記憶をたどつてみたい。

私が神戸商業大学予科に入学したのは、昭和十六年四月である。

神戸商大は大学に昇格以来、全国各地の高等学校、高等商業学校より学生を集めていたが、旧神戸高商時代に見られた独自の校風がやゝ薄らぎつゝあつたので、昭和十五年に予科が創設され、私はその二回生となつた。一学年で第二外国語のドイツ語が二組、フランス語が一組、中国語が一組で各組四十名の定員であつた。

予科は旧制一高に倣つて、全寮制（全員寮に入ること）、及び皆部制（全員何れかの運動部に入ること）を採用し、しかも、寮の室割りも、運動部によつて分けられ、いわば、年中合宿して来たことになる。初代予科長は花戸先生で、次代が氏家先生であつたが、氏家先生は后で我々と殆んど同じ頃に応召され、硫黄島の激戦に散華された。予科は学部より独立した存在であるべきことを強調され、運動部の練習も学部と合同でやることは、厳禁された。

さて水泳部であるが、このような校風と、当時の環境から予科水泳部としては、プール競技は軟弱なりとし、専ら四、五人一チームによる遠距離競泳一途に練習を重ねた。当時予科としては、プールもなく、予科のあつた御影の浜から、芦屋海岸へ、全員クロールでイルカの群となつて泳いだ。プールとしては、灘中のプール、それから、魚崎海岸にあつた朝日新聞の村山さんの別荘のプールを掃除して、その代りにシーズンオフの間だけ貸して頂いたこともあつた。いづれにしても、プールでの練習もやはり五キロ以上で、土曜には十キロを泳いだ。この成果は、琵琶湖及び浜

松沖において行なわれた十キロ団体競泳の全国大会に、遺憾なく発揮され、上位入賞を獲得した。当時予科は夏休前一週間、淡路島の郡家で全生徒による海水訓練が行われた。一日の日課は早朝の漱（みそぎ）に始まり、朝もやの中の沖の樽を廻つた。先生も多く参加され、寝食を共にした。水泳部だけはこのあと、さらに一週間合宿し、郡家の浜と江井の岬間を毎日ボートを連れて往復した。

入学した同年の十二月八日には、大東亜戦争（太平洋戦争）よりもこの方がピンと来る）の宣戦布告があつたが、水泳部としては、前述の歩みか許された。十八年になると、修法ヶ原の陸軍用地の整地や、製鉄所の勤労奉仕にも出掛けたが、水泳の練習は尙続けられた。

昭和十八年九月には、いよいよ戦線も拡大し、兵力増強のため、徴兵延期制度（学業にあるものは、卒業まで徴兵猶予が認められた）が徹底された。同時に予科三年は半年短縮され、九月には、予科の白線帽を脱いで、角帽に替えた。十二月には入隊するので、この三ヶ月の学生のために、憲法、民法、商法、経済原論、経営概論の五科目が開講された。入隊を前にしながら、淡々として聴講し、最後の試験の答案用紙の末尾には、

「先生、元気で征つて参ります。后はよろしくお願いします。大日本帝国万才！ 神戸商大万才！」と書くことを忘れなかつたのは、決して私一人ではなかつた。

十二月の出陣の前に、水泳部の先輩に、三官の近くの料理屋の二階で壮行会を開いて頂いた。学部へ入って、入部しただけであり、先輩の顔もろくに覚えていなかった状態で、その時御出席の方々の御名前は記憶がない。大学の徽章と「祝出陣」と金文字の入った朱塗の木盃を頂いた。大事に持ち帰って、故郷での出征祝の宴でもこれでさかんに酌を交わしたのを覚えている。

十二月二十日、所謂学徒出陣の一員として、佐世保軍港近くの相の浦海兵団へ入団した。そこで飛行予備学生に合格し、土浦航空隊を初め、出水空、朝鮮元山空を経て、最后是福島郡山空にて特攻訓練中、終戦の紹勅を聞いた。出水空では、水泳部先輩の石川七郎さんと同じ分隊であった。こゝでは九三式中間練習機、(俗に赤トンボ)でスタンド訓練中、エンジンが焼付き、出水海岸に着水した。着水時転覆し、水中に逆さまになった機体内から、ベルトを外して脱出し、さらに後席に同乗していた教官を潜って救助した行為は、全く水泳の心得なくしてなし得る業ではなかった。パラパラの機体をトラックに収容の上、ズブ濡れのまゝ帰郷し、

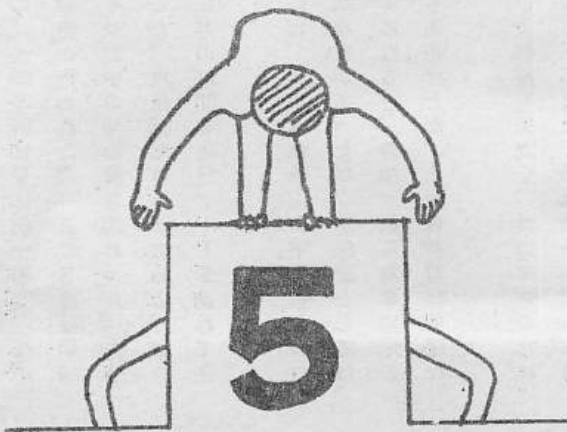
「……機体大破、塔乗員無事、その他異常なし。」

と分隊長へ報告し、その足で、当日予定されていた隊内の水泳大会に出場しようとしたが、分隊長に、

「貴様は、これ以上泳がんでよろしい。」

と言われ、泅々退去したのは、思えばファイト十分であった。

終戦となり、直ちに復員したが、十月から早速復学した。隊を去る時、二、三千円を頂いて、よし、これで大学へ戻れると思つたのは経済学部学生として、あまりにも不甲斐ない浅学さであった。戦後のインフレは、瞬間にしてこの金を低価値にしてしまった。このような状態の中で、もとの河童連中は一人、二人と帰つて来た。食糧難、交通難の中で、大学へは帰つたが、水泳部へは戻れぬ人もいた。蒸しパン、さつまいも、南瓜を主食とする腹ペコの状態で細々と復活した。予科出身の者を中心としたが、海兵出身の人や、専門部、予科生もこれに加わった。プールは飛込台下の深い方へやと溜る程の水であったので、松蔭女学校のプールを借りた。競技種目は昔に戻りさらにポロも始まった。一回生の井川さんがキャプテンで、苦難の時ではあったが、二十二年には三商大戦を宝塚プールで開き、神戸経済大学は、競技、ポロ共完全優勝を飾った。何分にも食糧難の時であり、プ



ールサイドで小さな玉葱を嚼って頑張ったものである。私か去つてから、プールは進駐軍によって接収された。(校舎は古林学長の御努力で接収を免れた。) プールは金網で囲まれ、小屋や、壁などには派手に横文字が書き入れられた。河童連中は、たゞ水の臭だけを嗅がされると言うあわれな数年もあった。

戦中、戦后特に戦后数年は水泳部にとっては最も苦しい時であったと思う。古林先生と同様、旅には決して水着を忘れない好きな連中の集りが、よくこれを切抜けさせたのであろう。戦后も既に三十年に近い。何時とはなくプールサイドに赤ふん姿が消えた。しまりかなくなつたので弱くなつたとは言わないが、水泳日本も神大水泳部も共に、緊禰一番の時であろう。

### 予科水泳部思い出の二、三

学一六 山 崎 健 吉

原稿依頼を受けてより、気になっていながらも、仕事の都合で出張が多く、且つ亦、石井君とも連絡とれず、六月中旬の締切に間に合うかどうか危ぶみつゝ、出張途次の輸送機の中で、鉛筆をなめなめ思ひ出の糸車を手繰る仕儀と相成りました。誠にお粗末不悪御容赦願ひ度く。

戦時中の思い出は、学徒出陣のそれを除き、予科水泳部の思い出

出と共にあったと云つても過言ではありません。昭和十七年の初めに、水泳部が発足した様に記憶します。当時の竹之下教授を中心に、先生の「ヤルデス」の一言に先導されつゝ、一回生山之内、井川両先輩を先頭に二回、三回生がそれに続いた。疲れても、眠くても、どんなにしんどい時でも練習はやらなくてはならない。その様な時「ヤルデス」と云う言葉は、まさに進軍ラッパの如く響いた。

当時は食糧もだんだん逼迫しつゝある時代であったが、予科思敵寮の近くに居られた竹之下先生の御自宅に、全員招かれヌキ焼なべをかこみ、なごやかな家庭的雰囲気で先生の御話を中心に、駄弁つたこと、それも度び度びに及び御奥様の御配慮は、大変なことであつたと想像するにつけ、先生御一家の暖かさが忘れられない。(それにも不拘、卒業以来未だ先生に御挨拶申し上げていない私はまことに不肖の輩である。)

予科水泳部は当時専門プールがなかった。灘中や村山プール(魚崎の海岸にあった?)、甲子園プールで基本的に鍛えられた。何せ私などは、それまでプールで泳いだことのない田舎出。真直に泳ぐことが出来ない。先生や先輩の御指導を得て、オーバーローに頭をぶっつけなくても済む様になった。当時は、プールでの競泳で記録を争うこともさることながら、戦時下耐久力、忍耐力を涵養すること、且つ又いさゝか戦斗目標に合わせんものと思

われる団体遠泳競泳が行われた。正式な名称は忘れしたが、大学高専琵琶湖大会、沼津の静浦湾大会等があった。従局、之れに目標を合わせての練習が必要であった。

プールでの練習では三千と五千を流す。御影海岸や淡路島合宿では団体遠泳練習に専念した。シーズンオフの冬場は専らマラソン練習。放課後から午后七時までの練習。クタクタになっても練習を終えた後の清々しい気分は、何と云っても醍醐味である。六尺を肩からかけて夕闇迫りつゝある浜辺のそよ風が心よく、寮歌道遙歌、放歌高吟。時にうどん屋へ押しかけて空腹を満たしたり、練習後寮までの家路は誠に楽しき限りであった。

大学高専遠泳競泳大会は、四、五名が一団となりゴール目指しての団体競泳で落伍者が出ては駄目。琵琶湖では堅田の浮見堂から大津の間約十二哩(？)、沼津静浦湾では伊豆半島西側の古宇町、沼津の獅子ヶ浜を直線で結ぶ湾の入口を横切る行程。競泳である故に殆んどのチームがフリースタイル。潮を吹き上げぬ鯨の集団がゴール目かけての突進。琵琶湖の淡水では汗をかき、静浦湾の海水では潮流に流される。チーム、メンバーがビートもスムースで水に乗っている時はストローク毎に琵琶湖や静浦湾を征服しつゝあると云う意識にもかられ、誠に爽快そのものであった。プールの競泳では味はえない醍醐味である。ゴールが近づくとつれ体力、精神力の限界への挑戦となる。それにしても琵琶湖の水は実に甘かった。

## 六甲台今昔

学二二石井義章

### (一) 敗戦

私が大学水泳部に籍を置いたのは、昭和二十四年から二十六年迄の三シーズンです。が、水泳部との接触はそれから更に三年遡る事になります。と云うのは大学予科の水泳部に三年間籍をおいたからです。

私が、大学予科に入学を許されたのは昭和二十年四月でした。大東亜戦争末期の空襲のはげしい頃で、中学の動員先である明石の軍需工場から、阪神電鉄御影駅の山側にあつた予科の校舎へ受験に行つた事を覚えています。

所が、合格通知と共に入つていた予科長の訓示には今、新入生を集めて授業を開始出来る状態ではないので、従来通り各自の中学の動員先で勤務に挺身せよと云うのでした。七月に入つてやつと入学式を挙げるから、集まれと云う通知をもらったものの、場所は滋賀県の安土村、ここに琵琶湖の一部をせき止めて湖底を水田によみがえらす干拓場があり、この作業に新入予科生を当らせる事になった訳です。吾々はその飯場の一角で入学式を行います。これから毎日、加藤先生、二宮先生らを先頭にクワをかつ

いで飯場から作業場へ通い、ドロと取組んだのも今はなつかしい思出です。

何でも、後で聞いた話では空襲が次第にはげしくなり、各地の軍需工場が次々と爆撃される様になり、このまゝ予科生を中学の動員先に預けておいては犠牲者がふえるばかりだと、少しでも空襲の少なそうな田舎の干拓場に集められたとの事でした。

しかしここも一ヶ月程で切り上げ、次は尼崎の住友鋼管に移されました。ここは予科の上級生も動員されて来て居り、歓迎会で寮歌「春筒台に草萌えて」と先輩が歌ってくれた声が、今も耳に残ります。

ここでは毎夜の空襲と蚤と虱に悩まされましたが、やがて八月十五日、陛下の玉音放送で戦争は終り、工場の片隅で皆為すべもなく、くやし涙にくれました。夜、寮に帰っても明日から工場へ出なくてもよいとの事だし、巷には早や米軍の潜水艦が大阪湾に入ったとか、交通機関は全部止ってしまうとかのデマが流れ、とにかく各自郷里に帰れとの事で、再会の希望もなく皆散々に別れました。

## (二) 授業再開

田舎に帰ってこれから何をしたらよいのか、百姓でもして暮そうか、それにしても米軍はドンドン進駐して来るし、日本はどうなるのだろうか。とにかくこの世に生れてから十八年間育つて来た環境も、教った歴史も道徳もすべて根底からひっくり返えり、第

一、二十才から先の生き方等考へても居なかった吾々にとって、これから先、何十年も生きるのだ、生きられるのだと云っても戸惑うばかりで、どうしても実感として掴む事が出来ませんでした。所がその年も秋風がたつ頃になって、学校から授業再開の目途がついたので集まれと云う通知を受けました。しかし既に予科は校舎も寮も焼かれてしまっていたので、あちこちに分宿、教室は六甲台の学部の校舎を一部借りて、授業が始まりました。

私は阪神電鉄鳴尾駅の東方、武庫川堤防近くの精神病院の看護婦寮だったとかの建物に入れられ、ここから毎日、阪神、阪急と乗継いで六甲台に通いました。バスはまだなく、阪急六甲から下駄をガラゴロ引摺って、あの坂道を往復したものです。

下駄と云へば、勿論靴もなかったのですが、予科にはまだ旧制高校の気風が残っており（敵衣破帽）が当時のファッションであった上に、戦後の物資不足が手伝って、皆テンデバラバラ珍妙な格構で通学したものです。学生服など着ているのは、兄貴が居た奴か何かで極く一部、大部分は、陸、海軍の軍服のお古でした。中にはカスリの着物にヘカマと云うのも何人か居ました。それでも帽子だけは先輩にもらったり、何とか苦面して皆一様に頭にてせていたのは、今の学生と大きな違いです。

食糧難も深刻でした。中井君が満員電車を降りる時、人をかき分けかき分けそれでも肩から掛けた雑糞のヒモをしっかりと押えて、やっとプラットフォームに立ち二、三步、歩いて妙に軽いのに気づ

き、ヒョイと見るとヒモだけで、肝心の雑糞は切り取られていたと云う漫画の様な事もありました。中の弁当が目当だったので。二十一年三月、学年末試験を終って田舎に帰っていると、学校から封書が届きました。曰く、「進級試験に合格せず、原級に止まれ」。つまり落第の通知です。初めて味わう落第の悲哀、四月新学期開始で、重い心をカバンに詰め悄然として寮に帰ると、同級生が、

「お前も落第か？」

と云う。おや／＼ と思っていると、出て来る奴出て来る奴皆、俺もだ、俺もだと云う。後で分った事だが進級したのは四割、つまり六割が落第したと云う事です。しかし、考えてみれば無理もありません。吾々は、昭和十六年開戦の年に中学に入り、まともに勉強したのは二年迄、三年になると飛行場作り等にかり出され、四年になつたらいよいよ本格的勤労働員で、新学期から工場入り、三交代で兵器作りですから授業は皆無、その上学業短縮で二十年三月には五年生と一諸に卒業させられてしまいました。

旧制中学何十年かの歴史の中で、四年卒業の証書をもらったのは吾々の学年だけの筈です。

それ迄も四年から上級学校進学の途はありましたが、それはあくまでも四年修了であり、卒業ではなかったからです。そしてこの年八月には終戦。二十一年からは又元の五年制にもどり、やがて新制学制に変わり、旧制中学は消滅した訳です。

さて予科に入ったものの、いきなり高等学校教育と云っても、中学の課程すらロクにやってないのに、出来る訳がありません。旋盤でも使はせれば一人前の腕はあるのですが、英語、数学、とみるとカラッキン駄目。そこで予科長はこのまま進級はさせられないし、と云って全員落第させては一学年抜けてしまふ上に、新入生の受入れも出来ない。遂に英断を以て四割だけ進級と云う事にされたそうです。負けぬ気の強い奴は、見込のない奴だけ進級させたのだ等と云っていましたが、これは眉唾です。

とにかくこうして二十一年四月から二度目の予科一年が始まりました。この年入って来た新一年生は、海兵、陸士等、軍関係学校からの転向組が大部分で、山本等はその口です。今でもこの連中から六回生が大量落第したので、七回生が少ししか入れなかつたと、いやみを云はれるのはつらい事です。

水泳部が練習を始めたのもこの年からです。前記の通り予科も六甲の学部の校舎を使っていましたから、自然学部水泳部の方々とも一諸に泳ぎました。学業半ばで出陣しておられた先輩方も復学され、吾々予科生にも指導して下さいました。

そんな訳で旧制十五回の井川先輩から、新制三回の田淵、溝口君等迄、回生にして実に十二回の方々と一諸に、現役時代を過ぎた事は有難い事だと思っております。

所が二十一年のシーメンを前にして、占領軍より六甲台接収の問題が起り、遂に講堂、テニスコートと共にブルーも米軍に取ら

れてしまいました。

二十七年四月接收が解除される迄の六年間が、丁度私の予科、学部在学期間になりますので、自校プールで一度も泳げないまま卒業してしまいました。

この頃の様子は数年前、菱泳誌上に「接收下のプール」と題して書きましたので省略します。

只、プール入口の大銀杏のそばに

このプールに許可なく立入る者は

射殺される事あるべし

第八軍司令官

アイケルバーガー中将

と云う立札が立っていた事が、くやくも情なく思い出されます。

### ㊦ 六甲台変貌

この頃の六甲台は一面赤松の生い茂った山林でした。濃い緑の中に白亜の学舎が、と云いたい所ですが、空襲からカムフラージュする為、黒いベンキが塗られ、それはげかかってまんだらになつた学舎が、それでも偉風堂々と建っていました。

本館南の台地には、高射砲陣地があつたとかで、塹壕の穴ボコがあちこちあいていました。何でもこの高射砲隊は非常に優秀で、撃墜率が高くB 29もこの上は避けて通つたとか、大学が無事

に残つたのもそのせいかもしれません。

しかしこの台地にもやがて米軍将校宿舎が建ち並び、緑の芝生と白ベンキの家の間を、金髪の子供らが走り廻る様になりました。

学生集会所の西側の松林も切り開かれ、前記の米軍将校の子弟「アメリカンスクール」が出来ました。校庭の一隅に置かれた真赤な箱から子供らが、ビンに入った茶色い飲物を飲んでるのが外から見えました。これがコココーラで吾々の口に入る様になつたのは、ずっと後の事でした。

将校宿舎のあつた台地には、農学部、理学部が、更には大学本部が建ち、又、アメリカンスクール跡には住宅公団が出来、うつ蒼とした松林に囲まれていた学舎は、今ではすっかり住宅に取囲まれ、いや、むしろ住宅の中に大学が引摺り降された感じさえする昨今です。

「終戦直後の水泳部」と云う題で、水泳部の事を書こうと思ひ、その背景として当時の世相、六甲台の様子等書きかけた所、その方が長くなってしまつて、肝心の水泳の事が書けなくなつてしまいました。申訳ありません。



昭和21年5月第5回寮祭記念(石井氏提給)



## 六甲プールとの縁

新一〇 萩原 武

私の六甲プールとの縁は昭和三十年、高校時代に始まる。昭和三十三年まで神戸高校に在学し、文字通り青春のすべてをその愛すべきプールに注ぎ込んだ訳であるが、今時の高校生と違って当時高校に入ったばかりの私は、未だあどけないジャリでしかなかった。

そのジャリがプールで水あそびをしている時に、当時勇猛をはせていた榊原氏、田淵氏、山口氏、松田氏に出合った時の戦慄感を御想像頂けるであろうか。

神戸高校のプールは四月の声と共に練習が始まる。水深一・二米の浅いプールで暖かく、六甲プールの底知れぬ冷たさはない。又プール掃除で水を抜くと半月、下手をすると一ヶ月はまともに泳げないのが六甲プールである。当然シーズン始めの神大水泳部の練習スケジュールは、四月神戸高校、五月松蔭女学院、六月晴天六甲プール、雨天神戸高校又は松蔭となる事が多かった。

この様な訳でジャリにとっては社会への窓を開けてもらったのであるが、神戸高校のプール掃除の時の便宜を六甲プールで得ることにもなったのである。

始めて六甲プールと出会った時の驚きも又大きかった。将に大学の風格であった。

ドビッシーの沈める寺を思い起こさせる木立に囲まれたその深緑の水面、歴史を語る古びたタイル張りのプールのサイド。静寂と深みは底知れぬ沼の感じであった。

そしてそこに身を躍らせる神大水泳部員を見た時、驚きは畏敬の念へと変わった。

堂々たる飛込台（競泳用に非ず）、シャレたクラブハウス、大学の水泳部とはこういうものか、これが大学なんだという感銘が深く心に残っている。その時には数年后に同じプールでもかく自分を知る由もなかったが、縁あって工学部に入れて頂き、早速プールに御礼参りに参上した次第である。

私がこのプールに通った四年間は、プールはその姿を全く変えなかった。風呂はなく、飛込台の下で炊くドラム缶ストーブが、我々の憩いの場であった。これを囲んでの団欒の思い出は何にも増して心暖まるなつかしさである。水は年に一度だけ水道水ももらえたと記憶している。普段はグラント北東の山中（今は団地と化した）にある自然水取入口から入っていた。練習後、空模様を見て仕切板を入れるには新入生の役目であった。

上級生のプール管理の熱意には頭が下った。いつも都合よく雨が降ったり止んだりする訳ではないので、日曜、夜間等には誰かがこの仕切板を入れにわざわざプールまで登って来たのであろう。

ブルが泥水で汚された事はこの四年間殆んどなかった。

カルキ撒きも又新入生の仕事であった。駐留軍の置き土産である缶入りの強力なやつをよく憶えている。

ブル西側のアパート群も未だ出来ておらず、ブルの水温が三十二度を越えると都賀川上流のダムに身体を冷やしに行ったものだ。この十年間に山が二つ程なくなり、ブルからの景観がえらく俗っぽくなったのも大きな変化である。

植中さんの思い出も又なつかしい。御忙しい中を、実の後輩に對するが如く、否それ以上によくして頂き、御宅にも何度か押しかけては御馳走になったものだ。打倒一橋の悲願は植中コーチを得てこそ、成り得たものであり現在の神大ウォーターポロにもその流れは生きている。私がブルを去った翌年に風呂が出来、そして古林先生、岡本先輩、石井先輩の御尽力と多くの凌泳諸氏の心暖まる御援助により、循環浄化消毒装置が出来、我が六甲ブルは現在の姿に生れ変わるのであるが、私には昔の六甲ブルがどうしようもなく懐しいのである。植中さんの事も含め当時の六甲ブルの思い出は限りがない。六甲ハイッ跡の事。カップ亭のこと、竹之内さんのこと、ブル掃除のこと。飛込台での虫干しのこと、等々。これらはすべてそれを書くのに最もふさわしい人が居られるので、その人達に譲りたい。この駄文を読んで思い立った方はぜひ凌泳に御投稿の程を。

## 春の合宿の思い出

新二 鈴 木 正 弥

昭和三十六年春 伊豆 峰温泉

十回生、柳本正雄キャプテンの下、総勢三十名は参加しており、屋外ブルなれど連日快晴に恵まれ、折から日水連オリムピックチームのバック福島選手などと、時間を調整して一日合計六〇〇m位のロング中心の練習であった。

十回生 山田貴彦さんの切れ味の鋭いブレネットと、

十一回生 窪田信雄さんの忍耐強いビタビタというフリーが印象深い。

昭和三十七年春 白浜温泉

十一回生 丸山卓也キャプテンの下、総勢二五名

古賀ノ井ホテルの屋外ブルを借り、近くのバンガローに自炊合宿であった。十回生、林荘八郎さんの妹さんとその友達に來てもらって、料理役をお願いしたが、お二人とも料理学校の生徒なので、栄養たっぷりの美味しい料理が毎日食べられ、連日の好天気もあり、皆大いに楽しんだ。

私自身としても、水泳部合宿で最も印象深く楽しいものであった。小学生の井口妙子選手の泳ぎを初めてみたのもこの時であ

った。

昭和三十八年春 琵琶湖室内プール

十二回生 武政英幸キャプテンの下、総勢三十名

琵琶湖畔にある草津の民営、室内プールに合宿。このプールは完成後間近い日本でも数少ない室内プールで、オリンピック選手のフリー山中毅選手、バックの福島選手なども合宿しており、双方時間調整して練習に励んだ。風呂で山中選手と一緒にしたが、その胸囲の大きさは目を見張る程であった。

十三回生の石原紘三君の軽快なフリーを、十四回生樋口周平君の鈍重ながら馬力のあるフリーが印象に残る。食事にでた新鮮なキャベツで、キャベツとはこんなに美味しい野菜であったかと、認識したのも、この合宿であった。

## 昭和40年代前半の頃の水泳部

新一八 木 村 多加緒

私は十八回生で昭和四十一年四月の入部です。私達が入部した時、水泳部は宮部主将をはじめとして合計八人くらいだったと思います。私達の学年の入部者が十人以上いたので、部員が一挙に倍以上になり、なかなか活気のある陸トレで、私達の中からトレーニングがゆるすぎるといふ意見がでてくるという、信じ

られないような現象もあったほどです。

その頃はまだプールは底が非常に深く、飛び込み台もありました。飛び込み台の上には確か夏の初めころに、藤色の桐の花が咲いていたと思います。その飛び込み台の上で背中を焼きながらウトウトとしているのは、何とも云えず気持ちのよいものでした。今になってみると、あの飛び込み台も残しておいた方が、よかつたかななどと思います。飛び込み台のところはどこかで捨てきた鉄パイプをくくりつけて、けんすいをしたりしていました。

それから私は、プールサイドでリスを二、三度見たことがあります。高校の時は回りが家ばかりのプールだったので、プールサイドが木で囲まれて、山の中の池という感じのプールが印象的であつたのです。

池といえば浄化装置のついた今でも、そのようですが、全く池のような濃い緑のプールだったので。春にはヤゴといっしょに泳ぎ、初夏にはトンボになった抜けがらが、プールにブカブカ浮き、秋には底にたまった落葉が巻き足で上にあがり、体にまつわりつくし、まさに诗情あふれるというか、季節感のあふれたというか、そんなプールだったので。

部の競技成績としては、ボロは私達の三年上の宮部さん達が卒業されたあと、私達が中心となってしまい、二年上の部員が〇、ということも大きく影響して、宮部さん達のけん命の指導のいかなく、相当戦力が落ち立命、一橋にはとうとう一度も勝てません



して握むことができたと思います。

それにもまして重要なことは、この闘争が私達の価値観、思想  
考え方とかいったものを変えるものであったということです。ま  
た情況、環境というものによって人間の価値観、思想、考え方は  
変えることができるものであり、変える方法はそれ以外にないの  
だということを、立証するものであったということです。他にも  
いろんなことが言えると思いますが、なんにしてもいえることは、  
これは私のこれまでの二十五年の人生  
の中で、私に与えた影響の一番大きい  
ものということができると思います。  
また私が最後までは闘い抜くことが  
できなかった。

「うしろめたさ」

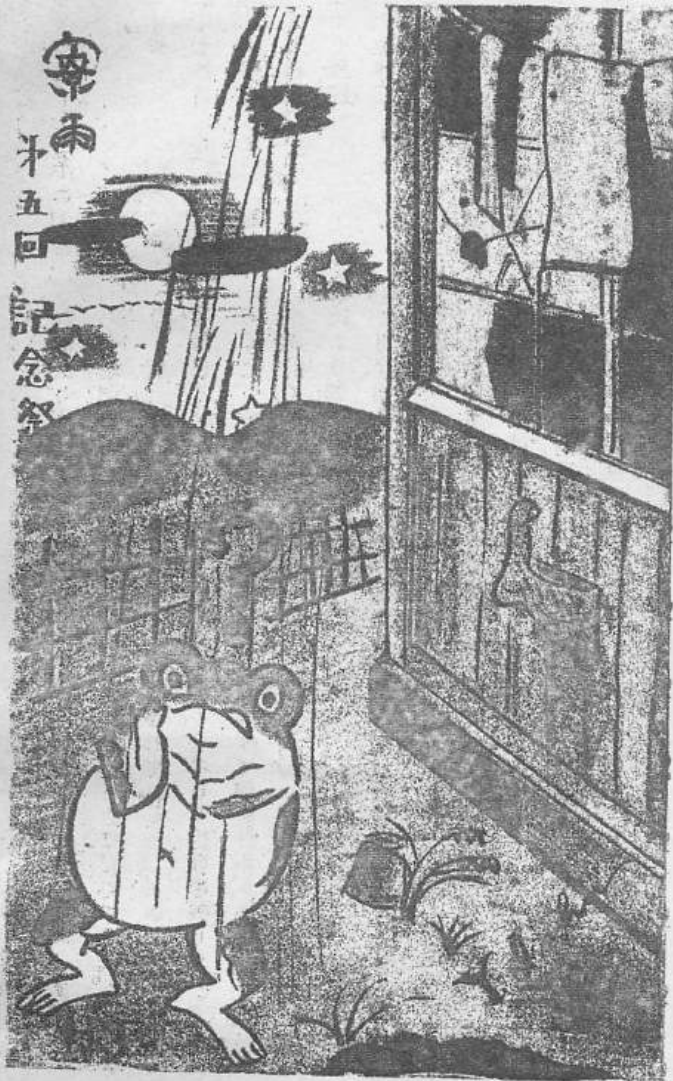
というものは、これからの私をある意  
味でしぼるものとなるだろうし、行動  
するときの原動力にもなるだろうと、  
規待しています。

## 通 信

新一〇 米 田 啓 祐

プールを見ると今なお胸がときめくのです。今は但馬の、全校  
生九十名ほどの小学校に勤めています。

一昨年以來、姫路の山口さんの直接の御指導をいただきながら、



児童をプールの中でもきたえることを始めました。今までの記録としては次のようなのを生み出しています。

男子 百米 自由形 一分三十秒

五十米 " 三十七秒五

五十米 平泳 四十五秒二

二十五米 " 十九秒二

女子 五十米 自由形 三十七秒四

二十五米 " 十七秒三

二十五米 平泳 二十一秒四

これだけの種目しか、町内の大会ではないので、他の種目は全然やっていません。昨年度の兵庫県学童記録集を見ても、ベストファイブにはいる記録も一、二あり、七月、八月しか練習のやれない但馬ですが、やればそれだけのことはあると、意を強くしているところ です。

## 古林先生を囲んで

新一〇 萩原 武

年の瀬も押し詰まった昨年暮の一夜、会長、古林先生を囲んで関西地区競泳が集まりました。教子田口選手のミュンヘンでの快挙、そして秋の叙勲の御栄誉と、先生におかれましては御喜び

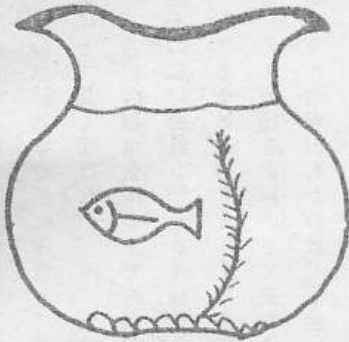
が重なり、小山副会長、岡本幹事長とも相談致しまして、まずは先生を囲んで一杯飲もうではないかということになりました。折りも折、関東支部では忘年会を計画されている由、その席でも御披露してはるか東京の空から先生に、心からの祝意を表したいとのこと。併せて関西支部での祝賀会の席で何か計画がまれば、全面的に御参同頂ける旨、小山質之助氏、山口宗樹氏、細田忠雄氏より御連絡を頂きました。

急な相談で又時節柄、案内は京阪神近郊の諸氏に限定させて頂きました。遠方の方々に対しましては誠に申し訳ございませんでした。したが、本報告をもって御説びに替えさせて頂きたく存じます。

さて当日は年末の多忙を極めた時期にも拘らず、学部一回山田常雄氏、学部九回中村市治氏、をはじめ二十名もの方々が出席され、又丁度選挙と重なって東奔西走の岡本忠男氏におかれましては、わざわざ奥様がおいで下さるなど、本当に久方ぶりになつかしい方々に御目に掛ることが出来ました。益々御元氣な先生を御囲みして談論風発、とっておきのミュンヘン土産話から、皇居の御様子など波多に耳には出来ない御話を聞かせて頂き、又私如き者には眼にする機会もない勲章を手にとらせて頂きました。

酒が進むにつれ席はにぎやかさを加え、例によって御達者な先生の、「神戸港町ブルース」に始まる歌の数々に、全座抱腹絶倒、三時間余の時間もあつと云う間に過ぎ、「商神」を歌って一次会のおしめくりと致しました。

肝心の記念事業計画の方は先生の堅い御辞意もあり、本席をもって替えることとなりました。幹事不手際で会の進行に色々手落を生じました事、特に時期の選定にあさはかで、多数の会員諸氏に御迷惑を御掛けした事を深く御詫びする次第でございます。尙本席の運営、会場の手配等、幹事以上に御足労、御面倒を見て頂きました石井義章氏、山口仁郎氏に心尽の謝意を表します。



## 岡本幹事長御退任に当って

学二二 石 井 義 章

去る五月十二日、兵庫県水泳連盟主催の、ある研修会があり、姫路の山口君、萩原君、高岡君、平岡君らと参加、その夜久し振りに三ノ宮をうろつき、翌十三日も早朝より研修会の続きがあり、更に午後には凌泳会の総会があるからと、山口君を伴って十二時過ぎ帰宅した私に、家内が福岡の岡本さんから電話がありましたと告げました。この時、

「あゝ、遂に！」

と云う感慨が一瞬、私の心をよぎりました。岡本さんの御意向は、はゞ察しがついていたからです。とにかく、早速電話をおかけした所、やはり幹事長をやめたいと云う事です。そして明日の総会にはどうしても出席出来ないのです、この事を総会にかけてくれる様にとの事でした。

岡本さんのこのご意向は、数年前からもらされておられ、毎年の様に総会の前にはその旨お申し出があったのですが、今年は何のご連絡もないのもう一年やって頂けるのかと思っていた所、ドタンバになって、やはりお電話がかかって来た訳です。

岡本さんとしては、福岡県会議員として公務ご多忙の為、時間

的自由がつきに、總會その他会の行事に参加出来ないのに、幹事長として留って居る事が心苦しいと云はれるのです。

しかし私は、会の実務は幹事諸君が立派に運営してくれているのですから、そんなに気にして頂く事はない、唯、岡本さんに幹事長として居て頂く事で、若い幹事は気持の上で荷が軽く、殊に高商、旧大学、新制大学と巾広い会員を抱える凌泳会としては、新旧の橋渡しとしてどうしてもそれに適した年配の方に、幹事長の席に就いて頂きたいと、毎年留任をお願いして来た次第でした。

事実そう感じて岡本さんをかつき出したのは、丁度十年前岡田昌三君と共に幹事を引受けた時の私自身なのです。現在、もっと若い萩原君、鈴木君が幹事をやっているのに、ここで岡本さんに退任されては、猶一層現幹事が可哀相に思えたのです。

しかし、今年の私には別な気持が心の片すみひっかかっていました。と云うのは、昨年十二月、古林先生の叙勲祝賀忘年会の折、岡本さんはやはり公務の為出席出来ないからと、わざわざ奥様を代理としてご出席頂きました。奥様はなじみの少ない吾々の会合に、最後迄おつき合い頂きました。

これを見て私は、岡本さんは責任感の強い、義理堅い人であるが、奥様に迄御迷惑をおかけする様では考えなければいけないのではないか、又、それ程迄に岡本さんに精神的な負担をおかけしている様であれば、凌泳会の都合ばかりでいつまでも、岡本さんのご意向を無視し続けるのはどうかと思つたのです。

その夜、山口君と床を並べて明日の総会にどうかろうかと、色々相談しました。明日の今日になって代りを見つける事は不可能だし、と云って明日を見送ると機会は又一年のびる。途中で臨時總會を開くと云う事もあるが、実際問題としてむつかしく、又ズルズル岡本さんにご留任願う事になってしまう。止むを得ず私是一つの案を考えた。それは岡本さんの辞任は辞任として可決し、後任が見つかる迄幹事長は空席とすると云う案である。

それが会則に合うかどうかは分らないけれど、会則に合はないからと云って、個人の意志を無視する事は出来ないと思つたからです。

翌日の総会で緊急議題として提出した本件は、案の定、現幹事からやはり岡本さんに留って頂きたいと云う強い要望があり、又後任が見つかる迄留任と云う意見も出しましたが、前述の通りそれでは又、ズルズルになる可能性が強いので、この際一応空席として、急いで後任を探す方が、岡本さんのご意向にそう事でもあり、又、後任の人探しにも気合が入るのではないかと云う訳で、結局その様になつた次第です。

私も岡本さんに留って頂きたい気持は人一倍持っております。岡本さんは何も出来ないのにと云はれますが、そんな事はないのです。四十二年に実施した、六甲台プールの浄化装置資金の募金の折には、その中心として活躍頂き、ご多忙の中再参、御来神頂くと共に既に福岡県議事に議席を持っておられた関係上、文部

省、或は大学当局への接渉、その他、関係各方面にお働きかけ頂くなど、その実現には岡本さんの御尽力に負う所、大なのです。

その他、三十八年以來十年間、陰に陽に競泳会運営の中心として、若い幹事を引張って来て頂き、岡本さんが幹事長として居て頂くだけで、幹事諸君の精神的負担が軽減されると云う事は、私の経験上も分り過ぎる程分るのですが、前述の次第で誠に残念乍ら、ご退任を可決せざるを得なかつたのです。

ここに岡本さんの幹事長御退任に際し、その経緯を御報告致しますと共に、十年間に亘る御苦勞に深く感謝したいと存じます。



# 昭和四十八年度凌泳総会議事録

昭和四十八年度凌泳会総会は、五月十三日（日曜）、六甲台教官食堂に於て

- 一、水泳部新入部員紹介
  - 二、昭和四十七年度一般経過報告
  - 三、昭和四十七年度決算報告
  - 四、昭和四十八年度予算案審議
  - 五、凌泳会役員選出
  - 六、その他の議題
  - 七、昭和四十八年度行事予定検討
- の議題の下に開かれました。議事経過は次に略記致します。

## 一、省 略

### 二、昭和四十七年度一般経過報告

#### 。凌 泳 会

秋の古林喜楽先生勲二等叙勲祝賀会は、十二月十六日

神戸「時計屋」で約二十名の出席者を得て、盛大に行われた。

なお出席者を次に記しておきます。

古林喜楽・山田常雄（学一）・中村市治（学九）及びその娘

さん・岡本忠男（学一二）代理奥さん・石井義章（学二二）  
野田浩志（九）・高岡保宏（一〇）・平岡昭朗（一一）  
萩原 武（二〇）・鈴木正弥（二二）・武政英幸（二二）  
北村義彦（二二）・前田和秀（二三）・岡田晶三（五）  
玉置 明（一八）・以西吉一（一八）・井上与志男（一八）  
井上史郎（一八）・長谷川健・佐敷定雄

・一方東京支部では約三十名の出席者で忘年会を持った。

#### 。水 泳 部

・関西学生選手権に於いて三部優勝を遂げ、二部昇格を果しました。

・三商大戦経過報告

### 三、昭和四十七年度決算報告

・会費値上げにより（一五〇〇円↓三五〇〇円）、六万円ほど増収あり。

・会員二百三十六名のうち、会費納入者九十六名。

40.7%

・詳細は別記する。

### 四、昭和四十八年度予算案審議

#### 。凌泳会予算

・前年より予算計上している予備費を、今後全国凌泳会開催の準備金ということで、全国凌泳会基金の名称で別会計処理とする。

・水泳部援助をもっと増やすため、凌泳会費の徴収率をアッ

プするよう努力する必要あり。

。水泳部予算

・収入の項の合宿費及び会合費は渡泳会よりの援助と区別して、今後は部員負担費という項目にする。

。詳細は別記する。

五、渡泳会役員選出

。岡本忠男氏（学一二）より幹事長を辞任させて欲しいとの連絡あり。

。公私とも多忙でいらっしゃる様だから、これを承認して具体的な後任の人選は、九月の月見の宴を臨時渡泳総会として、又は、四十九年度渡泳総会で審議する。

。幹事（萩原武（一〇）・鈴木正弥（一二）両氏）留任。

六、その他

。年度幹事について

・渡泳会活動を盛り上げてゆくため、現行の地域別幹事のみならず、年度別幹事を新設し同じ時期に泳いだ人達相互の連絡を密にしていきたいとの意見が出された。

・これに対し、年度別幹事を置くにあたっては、充分な検討と準備が必要のため、結局保留となり九月の月見の宴又は、四十九年度総会まで持ち越しとなった。

。会費徴収向上対策

・全会員、会費納入状況総括表を作成し、長期保管すると共

に、毎年の渡泳名簿に納入者については○印を記して、未納者に注意喚起する。

・各種案内状送付時に、未納入者については都度振替用紙を同封する。

。渡泳名簿について

会員相互の連絡が正しく行われるよう、毎年の渡泳名簿の住所、勤務先は最近のものにするよう努力する。

七、別記



## 昭和47年度決算報告

### 凌 泳 会

収入	凌泳会費	237,500円	支出	「凌泳」発行費	34,090円
	寄付金	43,500		会合費	20,300
	<hr/>			通信費	34,125
	計	281,000円		交通費	22,520
				水泳部援助	150,055
				全国凌泳会基金積立	20,000
				<hr/>	
				計	281,000円

### 水 泳 部

収入	前年度繰越	508円	支出	水連登録費	16,000円
	部員アルバイト	43,100		合宿費	216,832
	凌泳会援助	150,055		会合費	136,550
	部員負担金			設備費・燃料費	46,720
	○合宿費	187,700		衛生費	11,400
	○会合費	45,200		交通・通信費	1,230
	育友会援助	34,730		試合・練習費	23,080
	<hr/>			雑費	7,945
	計	461,293円		次年度繰越	1,536
				<hr/>	
				計	461,293円

昭和48年度予算

凌 泳 会

収入	凌泳会費	250,000円	支出	凌泳発行費	70,000円
	寄付金	50,000		会合費	20,000
	計	300,000円		通信費	35,000
				交通費	25,000
				水泳部援助	130,000
				全国凌泳会基金積立	20,000
				計	300,000円

水 泳 部

収入	前年度繰越	1,536円	支出	水連登録費	20,000円
	部員アルバイト	50,000		合宿費	320,000
	育友会援助	30,000		会合費	50,000
	凌泳会援助	130,000		設備費・燃料費	30,000
	部員負担金			衛生費	20,000
	○合宿費	300,000		交通・通信費	10,000
	○会合費	50,000		試合・練習費	100,000
	計	561,536円		(含遠征費)	
				雑費	11,536
				計	561,536円

全国凌泳会基金

収入	昭和47年度積立繰越	20,000円	支出	0円
	昭和48年度積立金	20,000		
	計	40,000円		

## 昭和48年度行事予定

- |                 |                             |
|-----------------|-----------------------------|
| 4月 2日(月)～6日(金)  | 春季合宿(石川県山代温泉)               |
| 5月12日(土)        | 新入生歓迎コンパ                    |
| 5月13日(日)        | 凌泳会総会(教官食堂)                 |
| 5月27日(日)        | 兵庫県学生選手権(神高船大プール)           |
| 6月 3日(日)        | 神戸商大戦(商大プール)                |
| 6月17日(日)        | 京阪神3大学戦(関大プール)              |
| 6月23日(土)～27日(水) | 第1次六甲台合宿                    |
| 7月 1日(日)        | ポロ、リーグ(大市大プール)              |
| 7月 5日(木)・6日(金)  | 関西学生選手権(大阪プール)              |
| 7月14日(土)・15日(日) | 関西国公立戦(大府大プール)              |
| 7月22日(日)        | 大阪市立大戦(大市大プール)              |
| 7月29日(日)        | 旧3商大戦(一橋大プール)               |
| 8月中旬            | 第2次六甲台合宿                    |
| 8月27日(金)・28日(土) | 近畿地区国立大学体育大会(奈教大プール)        |
| 9月初め            | 京阪神ジュニア戦(阪大プール)<br>ポロ、ジュニア戦 |
| 9月15日(土)        | 月見の宴(六甲台プール)                |

# 凌 泳 会 々 則

## 第一章 総 則

第一条 (名称) 本会は凌泳会と称する。

第二条 (事務所) 本会は事務所を神戸市灘区六甲台町・神戸大学に置くこととし、宛名は同大学学生課気付「凌泳会」とする。

第三条 (目的) 本会は会員相互の連絡と親睦を図ると共に、神戸大学水泳部の発展に寄与することを目的とする。

第四条 (事業) 本会は前条の目的を達成する為に左記の事業を行なう。

一、 会誌「凌泳」の発行

二、 会員相互の連絡

三、 定例総会及び各種の親睦会合

四、 神戸大学水泳部発展の為の指導及び援助

五、 その他、本会の目的を達成するに必要な事項

第五条 (会則の改廃) 本会則の制定及び変更は総会の決議によって行なう。

## 第二章 会 員

第六条 (会員) 本会の会員を分けて正会員、特別会員及び在学会員とする。

第七条 (正会員) 正会員とは次のものを云う。

国立神戸高等商業学校 国立神戸商業大学 神戸経済大学 神戸大学  
以上の諸学校に於て、在学中水泳部に所属したものを。

第八条 (特別会員) 特別会員とは次のものを云う。

一、 前条の諸学校で水泳部々長及び副部长であつた者及び現在ある者。

第九條（在学會員）

二、その他、總會の決議によって推薦した者。  
在学會員とは次のものを云う。

現在、神戸大学々生で水泳部に所属する者。

第十條（会費）

正會員は会費として年額三、五〇〇円を当会へ納入する。

第三章 役員

第十一條（役員）

本会には左記の役員を置く。

会長 一名

副会長 一名

幹事長 一名

本部幹事 若干名

支部幹事 若干名

会計幹事 二名以内

第十二條（改選）

役員の改選は總會の決議によって行なう。

第十三條（任期）

役員任期は一年とし再選を妨げない

第十四條（会長）

会長は本会を代表し且つ統轄する。

第十五條（副会長）

副会長は会長を補佐し、会長事故ある時はこれを代行する。

第十六條（幹事長及び本部幹事）

幹事長及び本部幹事は会長、副会長を補佐し總括的会務の執行に当る。

第十七條（支部幹事）

支部幹事は各支部の事務を執行すると共に、本部の諸活動に協力する。

第十八條（会計幹事）

会計幹事は会計の監査に当る。

第十九條（役員会）

会長、幹事長、本部幹事を以って、役員会を組織し、役員決議に従い会務の運営に当る。

第二十條（招集）

役員会は会長これを招集する。

第四章 総 会

第二十一条 (招 集)

総会は少くとも二週間以前に会議の目的を明らかにした通知を以って、会長これを招集する。

第二十二条 (時 期)

総会は毎年五月に開催するものとし、臨時総会は必要に応じて招集する。

第二十三条 (議 決)

総会の決議は出席会員の過半数を以って決する。

但し、当該議事につき、書面を以てあらかじめ意志を表示したものは出席とみなす。

第五章 会 計

第二十四条 (經 理)

本会の經理は、会費、寄附金及びその収入によって賄う。

第二十五条 (決 算)

本会の収支決算については、会計の監査を経た上、春季総会に於て報告し、その承認を受ける。

第二十六条 (期 間)

本会の会計年度は毎年四月一日より三月三十一日までとする。

第六章 雑 則

第二十七条

本会則は昭和三十九年五月十六日より発効する。



凌  
泳  
會  
々  
員  
名  
簿

昭和四十八年六月現在